



国土と言葉

十一

本多弘之

bonda hiroyuki

法蔵願心が莊嚴する報土を、人間の関心からとらえようとする意欲に対応するものが、「かんさつ観察」の対象となる浄土である。「かんさつ観察」と言っても教えを心に見ていくのであるから、つまりは、思惟の内容となつて、人間が体験できる場所のごとくに、言葉を通して浄土のかたちを語りかけるのである。『観無量寿経』（以下、『くわんぎやう観経』）はそういうかたちの經典な

のである。求めるものの意識に対応するのであるから、求める側からは努力目標となつて、教えに対応できればその浄土を自己の体験に取り入れられると思うのである。それで、この穢土の環境から離脱して、美しく楽しい環境が欲しいという要求に応えた対象世界のごとくに語られているのである。

『くわんぎやう観経』は、王舎城の王妃・韋提希夫人の

要請に伝えて説き出された。家庭悲劇にもたえ苦しみ、この世を願ひ美しい世界を願つて、釈尊のもとに身を投じた王妃の要求は、「じやうぜん定善」だつたのだ、と善導は言う。「きやうがしゆい教我思惟、きやうがしゆじゆ教我正受」という韋提希の要求の言葉は、いずれも「さんまい三昧」の異名だからだと。それに加えて『くわんぎやう観経』は、未来世の一切衆生の機類の救済を思い、「さんぜん散善」を説いて下品（悪人

の機類をも救うために、「称名」を明示するのだが、それは教主世尊の「密意」なのだという。「三昧」は衆生の意識集中の努力で体験される透明な状態である。それに対して、称名は仏の名によって、仏の側からの大悲の願心を教え、凡夫の救済を語りかけようとするものである。

しかし、この『観経』の説き方は、聖道門の人間観が色濃く映った「善人」本意のところがある。韋提希も自分を取り巻く人間関係が、自分自身の宿業因縁に深く結びついているのだとは自覚できないままに、美しい環境としての浄土を要求しているのである。「我宿何罪」（我むかし何の罪あつてか）という「わからなさ」は、自己を「善人」として了解していることの現れであろう。この「わからなさ」が、しかしながらこの宿業重き現実を超えた救いを要求させる深い動機でもある。だから、「至心発願の願」（第十九願）を、如来の「悲願」なのだと親鸞はいただいたのである。「発菩提心・修諸功德」を勧めるのは、人間の側からこの世を超えた救いを求めるにしても、自己の側からの努力しか発想してみようがないのが、人間の自力心だからである。その自力心の底に、自己の背景への「わからなさ」が張り付いていることにも、気づけないのである。

親鸞は、この善導の「教我正受」について

の理解をさらに進めて、これを「金剛の信心」であると見た。それは「密意」とされた仏の本意に気づき、經典の背面にまで光を当てたことによって見いだされた真実なのである。教えに真向かいになるなら、「正受金剛心」と善導は「帰三宝偈」ですでに述べているのだから、「正受」するとは仏の密意を受けとめること、すなわち名号の信心を得ること、すなわち「金剛の信心」を獲得することなのである。

それについては、善導が「三心」の解釈に最大限の力を注いで、特に「深心」について、「深信自身」（いわゆる機の深信）を置いていることを忘れてはなるまい。この文には、「決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、眩劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信す（『教行信証』「信卷」とある。常没常流転の身と信するのだ、と。だから「出離の縁」はないのだ、と。この自覚は、自己の現実の背後に「宿業」を見いだすということである。このことの意味には、「身」のもつ実存的な自覚と、それにもかかわらず「出離生死」と言われるような智慧の獲得ということが、見いだされているのだと思う。

身の自覚には、生死する事実への感覚がある。煩惱の身ということは、生存の深みにからむ事実なのである。この身に具わる闇を

「眩劫已来」に由来するといわれるのは、個体の感ずる時間を超えた「無始已来」生存の歴史が、生命現象の背景にあるからである。この生存の歴史には、個体の意識において体験できる透明感などでは払拭することのできない罪業性が付帯していることを示している。だから、この「宿業の身」の救済は、体験的な「三昧」の意識などで到達できるレベルではないということである。いわば、存在の根が大地に深く張りだしているのを、根を切って個を取り出して観察するような考え方は、存在の生きている解決にはならないのと同様である。

そういう根深い罪悪深重の背景をも突破するような開放が、大悲願心に乗託する信心に起こりうるのだ、という。身の「受けとめ」において、宿業の「わからなさ」を引き受けている真実の主体への信頼が生ずる。だから、信心は十分に眩劫已来の煩惱の繫縛を解放する力をもつ「智慧」だというのである。特殊な神秘体験を必要としない、自己存在の自覚的な智慧だというのである。「さとり」という体験で開放されるのではなく、大悲の願海に浮かんでいるという認識において、開放を純粹未来に感覚するのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）